

永平寺大燈籠ながし：永平寺大燈籠ながしの概要

永平寺大燈籠流しは毎年 8 月下旬に開催されるイベントである。会期中は、永平寺の僧侶、地元住民、来賓が一堂に会し、九頭竜川に約 1 万個の燈籠を流す。地元の方々が遺族に感謝の意を表し、平和と幸福が続くことを祈る機会である。

このお祭りは、祖先を祀る毎年恒例の仏教行事であるお盆と深い関係がある。お盆は毎年 8 月 13 日から 15 日まで行われ、この期間中に、故人の霊がこの世に戻り、親戚を訪ねると信じられている。家族は故郷に帰り、親戚の墓参りをし、供物をお供えする。お盆の最終日に永平寺の大燈籠流しで流される燈籠とよく似た燈籠を流し、霊をあの世に帰す。

昼間は、永平寺大燈籠流し祭りは、さまざまな音楽パフォーマンス、屋台、子供向けのゲーム、先祖の霊を迎えるための盆踊りなどで賑わう。お祭りは町民相互の親睦・融和・交流などを促進する。しかし、夕方の雰囲気は少し厳粛である。永平寺の僧侶たちがお経を唱え、地元のボランティアたちは曹洞宗独特の梅花流詠讃歌を鐘の音に合わせて詠ずるのである。その後、燈籠は九頭竜川に放流される。多くは死者の供養として供えられるが、中には祭りの参加者の希望と願いを込めて供えられるものもある。すべての燈籠が送り出されると、花火大会がイベントの終わりと夏の終わりを告げる。

このお祭りは、1988 年に地元の商工会議所の支援を受けて開催され、それ以来、中断することなく続けられてきた。2006 年、近隣の松岡町と上志比町が永平寺町に合併された。松岡町の浮き筏祭りと上志比町のニンク祭りが永平寺大燈籠流し祭りと統合され、現在では日本最大規模を誇る祭典となっている。三町のお祭りを組み合わせることで、住民は古い行政区分を越えて、禅の精神が息づく地域としての一体感を得ることができた。